

# 書かない 小論文指導

第4回

## 【論理的思考力を鍛える】

AO・推薦指導についての実績を残してきた神崎氏による連載も残すところあと2回。

今回のテーマは「そもそも小論文を評価する人は誰なのか」「評価者からどういふ反論が起こり得るのか」を起点にし、そのうえでの指導方法を紹介します。

これまでの連載では「自分の意見をどう構築するか」という話をしてきました。スポーツでいえばオフエンス（攻撃）を意識したものだといえます。一方で、小論文は他者の目に触れるものである以上、その内容を受けて読者は「問い」を抱き、書き手に投げかけます。時には内容に対して批判的な問いを投げかけることもあります。そうした問いかけを「反論」と呼びます。答案を構成する際には、問いや反論に対するディフェンス（防御）も考えなければなりません。

よく小論文の世界では「反論と反駁（再反論）を考えなさい」という指導がなされます。自論の反論に対する反駁を行うことで、自分の主張の有利性を示すということなのです。それを表現するために「讓歩構文（確かに…しかし…むしろ…」等）を用いましょう」という話になります。しかしながら、讓歩構文を形式的に用いるケースが目立ちます。反論と反駁が機能していない答案、自分が反駁できそうな反論を都合よく取り上げた答案も見られます。

### 「研究者（科学者）」が 成果物を評価する

私は「大学受験」小論文や、総合的な探究の時間における研究論文の評価者を大学の「研究者（科学者）」と想定しています。そもそも科学とはある対象において、客観的な方法で、筋道立てて理論を組み立てることを指します。言い方を変え

れば、あるシステムがなぜ駆動するのか、その要素同士の関係（因果関係、相関関係など）を丁寧に記述・説明することが求められます。ということは、研究者はこの眼差しを持って、答案を見ているということになります。

なお、「客観性」というものは存在するか」という問いもありますが、ここでは深く追わず「多くの人が認める」「リアリティがある」「本当らしさがある」という理解の程度に留めておくことにします。

認知科学者のステイブン・スローマンとフィリップ・ファンバックは『知ってるつもり 無知の科学』で「直観」と「熟慮」の違いを語っています。私の授業ではそれに「直感」という語を加え、科学者の眼差しと問いや反論について説明しています。

多くの高校生は「感情」「感覚」で物事をとらえがちで、小論文においても根拠を抜きにして文章を展開する傾向があります。まさに「直感」を駆使するのです。しかし、それだけでは研究者から「科学ではない」「なぜそうなるのか？（why）」「要素同士の関係についての説明がないではないか」と反論される可能性があります。

この回避のため、指導として「なぜそうなるのか？（why）」という因果関係を高校生に問いかけがちですが、私は躊躇します。そもそも関係というのは因果関係だけでは不十分で、高生側は「自分は追い詰められている」と誤解することがあるからです。whyではなく「これはどういうことか？（what）」と問いを変え、状

況説明を促すと要素の関係が見えることがあります。

私は、小論文指導の初期段階では状況説明を促し、その中で見出した（生まれたい）概念の関係を整理する授業設計をします。連載で紹介したLEGO®や付箋による言語化のワークはその典型例です。

### 科学的な思考を導く 「直観」と「熟慮」

一方、「直観」は前述の書籍によると「単純化された大雑把な、そして必要十分な分析結果を生む」ものであるといえます。類似の事例を過去に経験している（たぶん）という関係がある（に違いない）と類推（アナロジー）によって解を出そうとします。しかし、それでもやはり科学者は「本当にこの関係は成立するのか？」と問いを抱きかかえません。

この状態を打開するために、二人は「熟慮」が大切だと述べます。システムの要素の関係を丁寧に追うということ、つまり、研究者の反論を防ぐには、「直観」から「熟慮」に移行すること、システムの中にある要素の関係を説明を行うことが大事だということです。

この段階の小論文指導では、科学者の視点をどう持ち込むかということに焦点を置くこととなります。おそらく多くの指導者は第1回の記事で述べた「知識理解思考」を養うために、講義で知識を注入するという判断をすでにして、

しかしながら、科学者の視点を獲得す



### 神崎史彦

1978年生まれ。1996年に法政大学に法学部論文特別入試で合格。在学中より塾講師を務め、卒業後は大学受験予備校などで小論文の講義を担当する一方、模擬試験の問題作成者として活動。20冊の学習参考書を出版。現在は自らの塾を運営しながら、講演や私立学校での講師を務め、全国各地の高校教育改革ならびに高大接続事業のコンサルティングを行っている。2020年4月よりスタディサプリー講師に就任。社会人大学院生(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)。21世紀型教育機構アクレディテーションメンバー。

「論理的思考力の養成」という言い方で、そのスキルだけを切り取って学ばせる指導者がいます。しかし、より大切なのは高校生に科学の視点をもたらすことだと思えます。システムの中にある要素の関係を説明する力の育成に傾注すること

「批判創造思考」そして「知識理解思考」を行き来するのです。同時に、ICT機器を使いながら情報検索の方法も教えています。また、情報科の授業と連携したり、図書館司書の先生に勉強会を開いてもらったりもしています。

「論理的思考力の養成」という言い方で、そのスキルだけを切り取って学ばせる指導者がいます。しかし、より大切なのは高校生に科学の視点をもたらすことだと思えます。システムの中にある要素の関係を説明する力の育成に傾注すること

### ● 学習指導例 (講座3回目、対象：高3：120分)

「感染症は予防が可能であるが、発展途上国では感染症が流行しやすいという問題がある。もしあなたなら、どのように流行を食い止めるか」

本時のねらい ①科学の視点を持つ重要性を知る ②データ読解に慣れる ③情報をもとに仮説を立てる練習をする ④システムの中にある要素の関係を把握したうえで、その解決策を提案する練習をする ⑤自己が身につけようとしている専門と社会課題解決の交点を探る

★：オンラインの場合

学習活動	指導上の工夫・駆動質問・留意事項	教材・教具
アイスブレイク (15分)	※宿題として、新型コロナウイルス感染症対策(マスク着用、消毒、手洗い)が、ソーシャルディスタンス、クラスター対策などの科学的根拠を調べるように指示する ペアの組成、先攻・後攻の決定 個人ワーク[LEGO®をつかって、「新型コロナウイルス感染症について自分が行っている対策」を表現しよう] ペアワーク「つくった作品について、ペアの相手にその作品の意味を語ろう」	LEGO® ★家にあるものをつかって つくるように指示
ワーク① 世界の5歳未満児の死亡率の現況と、率が高い国・地域の特徴を把握する (15分)	問いの提示1「5歳未満児の死亡率の高い国や地域の傾向を知ろう」 ユニセフ「世界子供白書2017」統計データの表1:「基本統計」を提示する <a href="https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/01.pdf">https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/01.pdf</a> 個人ワーク①「資料をもとに、5歳未満児の死亡率が高い国、地域を挙げてみよう」 個人ワーク②「発散した付箋をもとに、どのような地域に5歳未満児の死亡率が高い国が集中しているのか、文章にまとめよう」	※Googleフォーム等を使って投稿してもらい、スプレッドシートで投稿内容を全員で共有するのよ い。以下同様
ワーク② 5歳未満児の死亡率が高くなる事情・背景を探る (25分)	問いの提示2「5歳未満児の死亡率が高くなる事情を探ろう」 JICA「国際理解教育実践資料集」の「2-2 保健・医療の問題」資料2「発展途上国で感染症が発生・流行する理由」を提示する <a href="https://www.jica.go.jp/mobile/hiroba/program/practice/education/materials/jhq8b000005wd9w-att/2_2.pdf">https://www.jica.go.jp/mobile/hiroba/program/practice/education/materials/jhq8b000005wd9w-att/2_2.pdf</a> 発散(個人ワーク)「グループで死亡率が高い傾向にある国のうち1つ選んで、その国で発生・流行する背景にはどういったことがありそうか、仮説を立ててみよう。ウェブを用いて調べ学習をしてもかまわない。」 ※付箋1枚につき、特徴や意味を一つ示す。※調べ学習として宿題にしてもよい。※特定の国を予め決めておいて、教員側で資料を示すことも考えられる 収束(グループワーク)「発散した付箋を分野ごとにカテゴライズしてみよう」(経済・法・科学・政治・宗教・教育・芸術・マスメディア)※ワーク③の「発散②③」でのやり取りに時間がかかるので、グループの人数は少ないほうがよい。3~4人程度が適切か。※個人ワークの時点でカテゴリー毎に分担してもよい	黄色の付箋 (75×75mm) ★ホワイトボードやJamboardを用いる。以下同様 ※調べ学習のためのICT機器を準備することが望ましい
休憩 (10分)		
ワーク③ 感染症の流行の原因・背景をもとに、解決のための提案をする (40分)	問いの提示3「感染症は予防が可能であるが、発展途上国では感染症が流行しやすいという問題がある。もしあなたなら、どのように流行を食い止めるか」 発散①(個人ワーク)「これまでのワークで考えたことを振り返りながら、グループで選んだ国で十分な感染症対策ができない理由を、仮説として挙げてみよう」※青色の付箋1枚につき、理由を一つ示す。 発散②(個人ワーク)「あなたならどう予防法を提案するか、対策ができない理由を解消するようものを考えてほしい。自分がすぐにできないようなものでも、直接的でも、間接的なものでもよい。自分が専門としたい領域でできることを、LEGO®を使って作品にしてみよう」 発散③(グループワーク)「作品の意味をグループの仲間につたえてみよう」[発表者に「この形・色・組み合わせはどういう意味を込めているの?」などと、作品の意味をより詳しく聞き出して、発表者の内側にあることばを引き出そう]※赤色の付箋1枚につき、意味を一つ示す。発表者が気兼ねなく話せるように場づくりする。発言を付箋に書く人を決めておく 収束(個人ワーク)「赤色の付箋で書き留めた内容を眺めてみよう。みんなが掲げた流行を食い止める案を実現するために、君たちはこれからどう力を身につけていくとよいか。大学でどう研究をしようと未来づくりに貢献できそうか。」※緑色の付箋1枚につき、力や研究内容を一つ示す	LEGO® 青・赤色・緑の付箋 (75×75mm) 
リフレクション・チェックアウト (15分)	学びの共有「授業を受ける前と比べてどのように成長したか、みんなでシェアしよう」 感情の共有「メンバー同士の気持ちを整えるために、授業を通して自分の状態や気持ちを語り、みんなでシェアしよう」	
小論文の課題 [ホームワーク]	「感染症は予防が可能であるが、発展途上国では感染症が流行しやすいという問題がある。もしあなたなら、どのように流行を食い止めるか。」(800字以内)	『小論文のルールブック (KADOKAWA)』の輪読

で、「結果的に」文章内に論理性をもたらすのです。よって、論理的思考力を単独で教授するのではなく、さまざまな小

論文課題やPBL(Project Based Learning)の中で学び取る授業設計が必要なのです。

左の学習指導例でも、このような科学の視点をもたらす具体的な方法を埋め込んでいます。

※神崎氏はLEGO® SERIOUS PLAY®(レゴ®シリアスプレイ®)のトレーニングを修了した認定ファシリテーターです。  
写真提供：工学院大学附属高校(東京・私立)